

祝

2016年6月 広島大学博士号(保健学)取得

## 安部能成さん(取得時59歳)

【論文テーマ】進行がん対麻痺患者に対する移乗方法の開発

## 人の尊厳を守る車イスへの移乗方法。普及のためにも博士号を取得

## ■末期がん患者でもトイレは自分でしたい

安部能成さんの肩書は千葉県立保健医療療養大学リハビリテーション学科の准教授。しかし元々は現場の人である。1984年に作業療法士の資格を取得し、25年に渡って病院のリハビリテーションの現場で、患者の身体と心の機能回復や改善のためのサポートをしてきた。そんな中、進行がん患者に対しては機能回復のためのリハビリテーションが行われなことを疑問に感じていた。

「余命何か月だから、やってもムダだから、痛みだけ緩和してそっと死を待とうというのはおかしい。余命何か月でも外に出たいし、食べたいものもあるし、何よりトイレは人の世話にならず自分で行きたいんです。おむつをされたり、管を通して排泄をしなくてはいけないことは、その人の尊厳を傷つけます。実は車イスに乗り移れば自分でトイレができる人は多いのです。でも介助の人手がかかるので病院は積極的じゃないし、患者も申し訳ないと思っただけの研究を始めたきっかけです。」

ただ私はずっと現場の人間ですので、開発した移乗方法を普及させるための発言力や説得力として、博士号まで取りたかったのです」

## ■1年待ちして、千葉から広島まで通学

がん患者のリハビリの分野をリードするのは広島大学の岡村仁教授だった。学びたいと希望したが狭き門で、空きがなく1年待たされた2010年、英語による試験を突破し限られた1枠を得た。

千葉から広島まで、初年度は月2回通った。ゼミのプレゼンテーションが年4回あり、そのときは前日から広島入りし図書館で準備をした。インパクトファクターのある英文誌に複数の論文が掲載されなくてはならなかったが、けっこう手間取った。メイ

ンの博士論文も審査システムが途中から変わる不運もあり、4か月の休学を挟んで結局1年がかり。6年目にして博士号にたどり着いた。

奥様とは修士課程で通った大学院で出会った仲で、高校生、中学生、小学生の3人の子育てで大変だったはずだが、理解はしてくれていた。

## ■あきらめてた患者の9割以上に希望が

安部さんが開発した移乗方法は、ベッドから車イスにパネルで斜面を作り体を滑らせて座る。骨に転移がある進行がんの場合は体を動かすと痛みを伴う



2003年にオランダのホスピス取材。「家族に排泄の世話を頼むくらいなら安楽死を選ぶ」という議論だった。

ことも多いが、この方法は患者を持ち上げないので痛みが少ないという。実際に対麻痺(両足の麻痺)患者に試してもらった結果、本人だけで移乗できた人が47%、1人が手を貸せばできた人が45%。進行がん患者でも9割以上の人が、車椅子で移動をし、トイレに行くことを可能にしたのだ。実際に余命3か月の女性入院患者が、これなら介護が苦手な夫に迷惑をかけないから家に帰れると、2か月を自宅で過ごし、安部さんも自信を深めた。

課題もまだまだある。主治医は「そんな良い方法があるなら家に帰そう」と言うが、現場は危ないことはやりたくない傾向にある。病室の狭さも問題だ。この方法で移乗するにはベッドの横に125cmのスペースが必要だが、日本のがん拠点病院を全国調査したところ、平均は113cmだった。

## ■がんサバイバーのためのカフェを月1開催

安部さんはがんサバイバーが集う「がんカフェ」を、仲間と一緒に月1回開催している。がん経験者が家にこもらず、行く場所としての役割で、ただお茶を飲んでるだけでも良いゆるい場所だが、勉強して専門家に提言する人など、けっこうアクティブだ。がん経験者ならではの貴重な情報が飛び交う。

「要介護の出発点は、一時的利用ならいいのですが、実は配食サービスなんです。重い物に出なくなる。情報に触れない。料理もしないし重いものも持たない。動きが鈍くなってケガをする。晴耕雨読のように体も頭も使い続けることが健康長寿の秘訣です。だから生涯学習が大切なんです」